



平賀實記

乾

又 6
9386
1



平賀實記

目錄

東都神田玉池
安田文庫珍惜

時實堂

源月生立發文之事	源内瀨別退去之事
源内大坂と評判之事	源内系於白糸之事
三井第源内源内對面之事	源内不二山堂一見之事
源内源河と池之事	源内儒學講法之事
江戸表と趣之事	三浦平之助方尋之事
朝鮮人來朝之事	源内管居西也來之事
合戦先令對面之事	源内工吏之事
甲列洞山を預奉	三井第源内源内之宅之事

三井を養育す事

雛落の始て對面す事

再長崎に趣人と流す事

再長崎に趣く事

源内長崎を立返す事

檜木町に卜居す事

願す事

源内歎辭す事

源内桶す事

神田橋邊の屋敷に居る事

道中長者の事

吉雄源内を歎く事

江戸先古産す事

源内院布を以て衣冠を僞人と

源内流世を化速懐す事

安田文庫實記上卷

不出閩外

源内生立後女す事

平賀源内名國倫字士驛跡旭溪と云徳列の人の

父を定右衛門と云て徳列侯の是將之源内々初め

の時より同家中 吉田定右衛門と云ぬ政役の官に

為坊主より公にして十歳の時に休まると云大智

賢くして政務あり生れ在定右衛門も不便を尋

ねまひたり或時縁側より出て夕飯を食し一時

折妻夕暮あり大なる蛇出て庭前を這りて

定右衛門遠より見ゆりて 珍奇蛇あり是こそ

漢の張仲景の論也。金蛇也。今鹿の
蛇令色の光るるを和漢と云。地は満とも功徳
於てい遠くま。誰ぞお殺す。と云。知也。
体は終り十氣は海は少坊にぬれをぬきを
自取として証居る。家来とも大智証集り方
と遊早。お殺さんと云。付体言をうめて夢
をうけお殺する。ぬれぬ。して生る物をお殺
せ。殺。糸集りて毒糸をけをると取あり。さ
ら。して紅色の薬はけり。ま。子。油。ひ。し。生
い。り。時。く。生。糸。を。油。く。ぬ。り。て。自。然。と。殺。を。取

思ふあり。毒糸を生せず。蛇は毒も毒く入て
油を以て殺す。と云。ぬれ。少兒の一云。ぬる
糸。糸。の。云。糸。と。感。一。糸。油。毒。入。と
胡麻の油を毒。入。て。お。ま。れ。今。思。進。て。梓。の。先
よ。て。進。入。ん。と。糸。を。体。に。大。笑。ひ。薬。と。成。水。
一人の言。ぬ。す。糸。の。調。法。の。物。を。何。を。也。人
の。怪。象。を。ぬ。ん。や。と。云。て。蛇。の。糸。中。を。ぬ。つ。と。み
何。の。苦。も。ぬ。く。油。は。糸。也。蓋。を。して。人。を。毒。傷。つ
お。れ。持。系。す。い。さ。り。ぬ。り。と。云。ぬ。か。知。お。の。御
き。亦。ハ。玉。蓋。を。ぬ。く。一。云。実。は。怒。り。す。き。少。傷。と。

皆々感しける人字を傳へて感入神童の蓋を
立て見むとせしれを休ま押留て中々蛇い
まゝ死切ゆし直流の世世用之想し生まぬ
信として生を悦ひ死を愁る天性自然の生歎之
利澤を倒多し死は歸んで生を常を文恨を果也
業もまゝ有る人とやらハ首斗を杖王の
命をたしとせし小蟲として何れとらへしと製
しこれ字を傳へ初筆入神童の蓋を小傳と
或ハ傳ふと感し神童使を加してこれより夫
して一家中評判して天物小傳と異名を傳へ

とそ十文筆の時感入とあり主人字を傳へて
私伝初めは直意を傳へて後父母も一
何卒一度ハ直意謝し直意を傳へて私
老言直意を報ふて事不命し私伝ハ感願ふ
父の家智を命し直意を傳へて私
直意をかせし一是も又直意を傳へて一
孝行も叶ふし直意を傳へて何卒直意を
直意と一何れ直意と直意を傳へて直意
直意を傳へて直意を傳へて直意を傳へて
直意を傳へて直意を傳へて直意を傳へて

と申す所の西條の志保才成生と云ふ西條子と云ふ老之
當年十の輩より如何に何卒此子醫術方の能く醫學
致させ申すべくと申すれは家光藏の面々と申す
れは彼一家中評判致す天狗小僧と云ふ物やと
聞れり申すは御親秀才一家中の面々天狗小僧
申す取及いませぬれは取及たる者之は子醫術方の
植村酒庵丁を本姓も違へる者彼一紙付申
す一と家光藏の指書に但せ字を傳へて休まらば
申すらばは方る度々味を致すと云ふは我れ合意
不致す申すは方る文を借入て之は我れ我れ申すも

都る申す方りお世の障りしに方常々學文を好丁そ
幸なれは醫術植村酒庵丁を上子あり申すは
申す上學才も自由なれは彼一紙付して各醫者と知り
父母の名をも取し一と申すは方るを家光藏申す
と披露し一と申すは方るは休まらばは休まらばは
志保才成生之は志保才長袖と云ふ傳信子
申す私恨も方るなれとも親を此傳信をも五勤
いと武役の教も加り申すは方るは傳信同前
の長袖とお申すは方るは傳信同前
け上の西條よけは方るは傳信同前

中々此ハ字在傍ノモ理の当然ニ論方なく物々ハ
別子ニ更々之トトク家を蔵ル中々ハ体立
危角信よぬきまを之いり改し事と云れハ
物々奇持者ハ何れハとて是時ノ時信子ハ
元立孰し先々皆くハ藥苑撰ハ是時中身
と更よりして字在傍ハ表向キ書来つて中
渡りハ字方々ニ知方物ハ体立る秀女ハ所
在家中評判之け上々学文ハ信油所なく改之
し又ハ内藥苑撰ハ見ぬ為藥園を信を是時
組中ハ字方々ニ事ハ字在傍ハ信を体立

中々せられハ程有と西更改し一平賀源内と改名
て尚方志字在傍ハ屋敷ハ字公を物ハ之改
源内ハ生立古今ハ秀女と云ハ之を
評曰源内十二某の時元服して源内と改名して
和漢の書眼をすしハ字と云ハ字在傍ハ方
同居
ら物ハ字ハ不審宛定在傍ハ方同居
歎仰ハ如ゆと云ハ十二某の時父没して喪を物
ハと云是を見れハ父と同居多ゆ

源内後列退去の事

源内ハ之命授るく藥園を信して光臨を送る

本年に及んで源内もや大業あり或時源内も業
々々かく薬園を致して先帝を送るといへども
我言名を揚ぐる不能人の下に降て徳を居せん
る測り恥し而志を立ん者下よ居よとも
將軍の心録本よて功を天下に取よハ不朽の大切
物なりと不答して先帝帝とヤ立勅書不を引
込之籍も抱く一年斗りるく久し病室の
るゆれハ高田守左衛門も云洋ゆく或時足舞と
て源内も宅ハ華々源内も世世なる案よ書物
を御起居不自由の物ハ守左衛門いり源内

関羽ハ毒矢を授せり春秋を讀くと守左方病
中の苦痛何を以物やと問ゆれハ源内ヤルハ
私儀苦痛物ゆき管子を友と改まると云れ
ハ守左衛門ハ物をも云す居たりル守左衛門
守左衛門ハ守左ハ私儀永くの病室御を公仕
るも守左引籠り事志ハ海急之病氣授かると
云ハ守左君ハ守左不幸とて守左速の令使計り
物ハ守左御御に社式を譲り私儀ハ引込中ハ
と云れハ守左衛門も守左の達し守左ゆれ源内
ハ守左中ハ守左衛門の下ハ居ハ守左量ハ遊

心身より成程おのるも之長病のりあり難む之
と同意して役人とは若く家督相續為政度申出
を中より依り役人亦亦ありて評議しるるを懐
人相ふれと承くの病常止り分ると云者も又
源内内存在を崇ししる者ハ愚き者の政方と評
議之れとまとの役よ立ぬ者を道の論之と評
議して中央の病に家督相續より夫分して源内ハ
病氣養生と云解し北河長清の遊方し
小色辞役彰城^{ナカキ}東吉と云者の方へ依りて唐人
を交へ入込りるを年序人持後りし一茶種よ

偽物多しと云りて京大坂の茶屋大下換毛
口しるるを承りて右の賣買の席へ色辞と同
して若端批判し偽物を見出して度しこれハ
南条小京賈人とも源内茶種よ安きを感心
し偽物を持後りし其年分止りこれハ長清の
も大下感し長清の医師也并に色官の者とも
源内へ依りて本草おし熟をへしと云り後り
家よ長清おし其の儒者よ渡邊力翁と云者あり
右學よ長しして持識る者之源内ハげ度長清
表より評判能を學何とも合意けぬるこは

源内ハ漢列の生身より一友を返して浪人——今
世爲一未く業程の志傳を汝法をりる何をも念息
かりをせぬとわれハ何れハ源内ハ業程の志傳を
改め未るへき是令く業程をせりし——己ハ
功ヲ得りんと云り利欲の爲之也——へき人ハ非と
云く物語志をりり式時源内ハ著述也——王霸論
と云ふをえて大ニ笑ハヤリハ源内ハ辨非を好ん
て讀しる者と見下り文章ハ古文辭を學志と少
し中く古文辭を學ぶ——曰六の切抜文章之
と笑ひし——り力爲り費子ハ源内を信作せず

評判室——くされハ紅毛のを辭へ使りて蠻語を
學ひ或ハ蠻語の環笈を求めて己ハ其を凝して
大ニ但せし——在子於てハ紅毛人も舌ををりり
と云や力爲りも大の細工ハ感心——學文ハ鬼ノ角も
誠ニ奇才の人物也と評判し——り友再評判室に
ありは以後ハ源内ハ學文抄法を止め一向紅毛の細工
の心を寄られ種々此環笈集りて玉表ハ由西の
表ハ諸君も亦其も移るる之を以て玉表ハ
度り字表の玉表並に玉表も暇乞して玉表
志してお立——りり先ツ大坂表も逗留して

乃んと江戸堀竹倉町を尋ふ傍と云者の庄を借り
逗留し内紅毛の細工を人に見物させ富貴な町
家と云易く成るを云

源内大坂を評判す事

源内大坂へ出張して富家の町人云易く出金せ
る或時申渡金無印と云へる者中より桑子の評判
出せり若年より偏歴して金數ハ見すと云へた
西の方の地理ハそせり然るは備後守の土地を以
て砂糖より宜しき土地之を度る砂糖高買の
るそれハ宜しき土地の旨悪ハ云々云々云々と云

物産しそれハ桑子印ヤウハを砂糖の上取ハ免角
満去でありれハ宜しき日本製の砂糖ハ其の旨
くして上白此色なり云々云々と云源内ヤウハ
花も云べし云々砂糖の土地ハ砂糖の上取之は
南東の土地ハ砂糖の土地ハ砂糖の土地ハ砂糖
花それハ土地ハ宜しき云々云々云々云々云々
宜方を見立砂糖を植付農い方を法のをり其後
三日中も上取の砂糖出せり云々云々云々云々
其許其志何ハ備後守田地を求め砂糖を植付
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

大分の利益之、中より吾に弟、も富の町人あり、
夫を易する、之を倭後、ハ禁遠縁の志あり、
早速畑を求め、ハと飛御を以て、中より倭後
よてハ、振子ハ不知意キ、能細地を求て、吾に弟、方ハ
知り、セり、れハ、吾に弟、ハ、源内、ハ、志り、ハ、の、物、渡、して、
務用、意、して、源内、と、同、及、して、倭後の、風、ハ、疑、キ、
砂糖を、植、育、り、源内、ハ、吾に弟、ハ、砂糖の、貴、ハ、方、を
傳、文、して、而、一、尺、して、又、大、坂、ハ、戻、り、り、是、金、を
吾に弟、ハ、利、徳、を、身、て、金、限、を、自、中、に、す、す、ハ、階、杖
等、ハ、砂糖の、製、法、を、池、と、

鳩の毒 蜜を交じり、毎日干して細末にして砂糖を

植つき、砂へ交て、植る。

本草 砂糖の本、寸、寸、延、り、方、時、分、其、料、を、水、と、き、
根、ハ、か、け、り、る、毎、日、二、三、度、三、十、斗、り、同、也、是、ハ、其、れ、ハ、干、
右、の、や、く、煎、法、して、能、く、小、石、を、捨、ひ、出、し、て、是、上、を、ハ、
毎、日、夕、方、あ、か、し、く、根、を、か、く、る、之、お、吾に弟、ハ、源内、ハ、
砂糖の、傳、授、を、得、て、程、なく、砂糖、如、乾、し、て、其、味、
實、ハ、蜜、の、也、く、色、ハ、大、白、よ、して、後、り、砂糖、ハ、吾に弟、
吾に弟、ハ、大、分、ハ、吾に弟、ハ、大、坂、表、ハ、戻、り、て、源内、ハ、志、り、ハ、
物、渡、して、謝、礼、と、して、金、百、両、源内、ハ、神、を、り、り、

源内大よ立腹して御もき度六不持成人之に
傳授を合よ為んと爲りて何そ人教一
んを度と心易よ從て傳授せしる之終よ全浪
を以て謝礼とハ人をもる席よ致ししる仕方あり
あり持物ありと大よ立腹しる在毒臣帝も
恥入て終ハ終よ從て一末も何そ此用ありハ必
は作舟ありと源内と急流中して地もかく
交りりると十年餘りて早列合山影よ良世毒臣帝
合よと成ハハ謝礼と見たり

源内京教者白人白絲よ事

源内ハ大坂の評判能りれハ富める町人とも心易く
出會して夫も京教ハ立越て旧條を造り度
を借り大坂町人たり全浪教多様別りれハ
かも指交りりもかく富もよ事して居たり
るも末々京教なるハ七方別條もかく振く二夫を
是り一或日祗園町遊山よおりの折柄白絲と
いふ白人三井の別條の白人こと不の凡そ立見れハ
源内をかく京教ハ換り不ハ三井假令何夜の
大店と云とも評判正へき振あり末は學の孫子
ハ不気とも新京中の評判を見れハ少の全浪

借り切つたり押舟出かぬまはと云はれし白練ハ
三井大店の別荘あり衣袴もたあはす
尊く交る旅も源内ハ例三居並より源内より老
あり位一多分教をもあし否るをを授けて源内
あり線子向て中旅ハ三井とやらハ其許の客を由
束放してハ其一番の長者之物もあはる客を掛あは
川竹の節をして徳人の教をさすする何ともま
意好難し何そやよく身後して昔界を道しよや
といひく交授りれは志し線も恥入る方糸をよて
を愛も志しけて足くより白練ハ産交を立て

不使成として主夜ハ産交を改りり源内ハ心の内
及社をんと舌赤して世音攻めや否や井筒屋ハ
使をきし白人白練ハ身法志しし一あり私宅ハ
系られよとやきられハ井筒屋も白練も拙く否
誤り客人の深き子細しそ何しんと井筒屋ハ源内ハ
旅宿ハ趣きり源内ハ井筒屋ハ事今やくと
待居より一不智祇園町の井筒屋と案内し
これハ源内ハ是くと拓し酒肴の設意はしして
中出しりハ此夜呼し白人白練ハ三井ハ別荘の
白人ハ由ま在風と産交を呼し出せし一云り

糸子障りりや病床と云ふ一て度愛せり
何ぞ迷恨歩する一薬り云一云糸子遠く
令子何れ入しとて此地立をしてハ金糸
之方と能く不勞して返答せよと申す井筒屋
十方これ此を何れ終る去彼白人をまゝ人
石抱りとのわに在りけとのに在読不致ゆるハ此
中糸子一面白待て下り一と申す糸子ハ源内
屋理り伏一在りて照後りと待一必く外の
お蔭ハ致す一と申すと意度一合めて井筒屋ハ
宿下り度一と申す

三井ノ糸子障りり源内ハ對面と云ふ

井筒屋ハ宿下り度一申す白糸子白人糸子ハ
お蔭ハ不思後るものには此方ハ浪人平賀源内
云一人白糸子ハ唯一度面談をせり糸子ハ入り
身交す一と申す糸子ハ中裁一と申す許も仕合
仕合之令子何れ入るを許方ハ海へくやと申す
これハ糸子ハ大に悦び此名の白人安全と云ふ
糸子ハ先令子七八百あると云ふと白人お蔭ハ上白
を呼出一と申す不思後には此方の糸子ハ
何れお蔭ハ仕合する糸子ハ海へ上るものと云ふ

恨んで物遣しられ白練の物をも云ふす此ころ
むひて居りて懐くまで中極の何とも心得難
る事之度お斗唯一度知て在程執心多き事
やまらざるは子細き事何れもせよ三井屋も
揚造の事あれは女師匠の志のしと早速三井
中甚しけれは三井け中を望といふや原の恥辱
あり昔は下中身は後さす」と評伝室中
源内六井筒屋の序りてより早速大坂に飛脚を
遣し申徳庵を京都方面に送りし我未けに京都
於て令設けの事有令子貳千両斗十日の内

借財中しく約束の日限より早く返財中しと
申送られは毒に病を先達と物頼の謝礼ある
事互れは何卒用立を度しと云くは某の
令子貳千両代に持せ京都に送りし源内を
ある志の令子を馬より送りせ徳園町井筒屋を
方新亭に某物に中らる白練の事今
何の由故命し侍りて裁きしお誤り止振
今日令子持来しれは所今の月お誤波し
宅にて居ると侍りて裁きしお誤り止振
某物も任天して政文令子貳千両も持来しは

實は身の上の仕合を若と白練を呼ぶやうに
ひしめく所は三井の御門のり代利を傍と云ふ
井筒屋の事りて云ふはけ度には方の西宮白練を
身法に成る目か交るの然り彼の白練を
三人揚造の白人之と上よ三人家法とて一交を
て酒のおとせしとせし 控妓は派法とて
片身をもつて三井家の法式に納まは白練の
淫を御キ女をれハ唯け里に浮れをすを好む
之人に因り粧する所揚造法に造りて
身法法を代りあり 委細は御指し 左の如く

御前には身法未だてハけ方の御書を
何れを許し 元斗強りれしと
白練の令納しと大よ其の免も角も
手代利を忠を一乃とせし 御源内の方
の中は海をくしと
七百ある後とせし 又は
系身法の式法も

彼を去るといふは、これハ毒物ハよく二人方の中を
白練の年季は、文ホカ、あて、源内、は、後、先、白練を
咄あて、あつ、の、り、怪、り、れ、少、白練ハ不害、暗、大、
抱をも、あす、飛、り、り、り、利、害、け、由、を、あて、任、天、
け、白練を、交、出、さ、せ、て、は、三井家の、恥、辱、と、案、内、を、
乞、て、源内、の、産、愛、と、行、伝、く、始、終、の、抱、語、し、て、何、年、
白練を、強、取、れ、と、云、け、所、源内、や、り、り、ハ、三井家、ハ、論、
日、中、一、の、令、持、ち、て、鶴、の、池、を、そ、う、り、も、名、実、の、
家、筋、之、然、り、ま、け、白練、の、り、を、許、の、之、人、の、別、席、
あり、由、け、程、取、り、及、ん、り、棄、る、ハ、西、風、道、の、早、族、

の、老、こ、ら、去、一、度、酒、の、相、手、と、成、り、方、遊、妓、を、又、他、人、
此、度、と、物、と、よ、ら、る、富、も、如、る、者、の、恥、辱、を、之、況、や、
三井家、の、と、よ、て、ハ、右、族、の、り、控、音、一、言、謂、れ、命、
を、量、り、命、全、浪、を、亡、推、り、ハ、不、智、の、あ、り、あ、れ、と、け、牙、
後、ハ、た、遊、す、世、上、の、評判、を、以、案、の、毒、も、万、有、凡、
富、貴、人、と、ハ、象、鼻、冠、利、田、は、任、居、彼、す、飯、酒、之、節、
三井、中、と、あ、り、之、富、も、去、ハ、汚、山、阿、れ、と、町、家、ま、て、米、
ま、と、り、人、を、け、あ、家、か、外、ま、り、す、中、華、ま、て、物、
米、公、と、申、出、の、富、も、あ、り、去、ハ、日、中、の、あ、家、も、物、米、
あ、り、方、有、り、物、ま、け、取、り、る、り、日、中、の、恥、辱、と、あ、り、

少々の拙者身詣波一して山崎道なる如き別荘
を接へ白線をきり一色生涯化人の願者と存す
と思ふや一八合く三井の恥を思ふ事非す日中の
恥を思ふ事ありと無言流るやく子云れ利業
も及理は賤し何主人の中世免角は亦中世
了と宿亦の海り早速八第の門はけ由物治りれハ
第の門も勢入扱く阿ふ人物も多物ハ何れも
せよ面白く人之我事面談す一と世に井筒屋家
誦きりけ三井第の門ハ料廬先生の門先もて
学事も多者あり源内ハ大第中して上世友

たる才子ありを喜ひ先井筒屋の案内させに言ふ
の咄一終る三井源内ハ向て云振る扱き度ハ
勢も入しり思ふは白線ハ身詣のり治る源切
初るものも一途一連もの多し大向線を扱き出徳
下り了しき度の後の色り白線を他人ハ文書は
てハ拙者も洛中ハ恥辱とくハ身詣波一と世
何れと子細きて控並一しき度の思ふも恥を
云はよ云れハ源内ハ何事あり早竟き度の恥
を思ひ又富も多し久家の世上の云事ハ掛んす
日中の恥を思ひハ何れハ計ししき度方よりく

世話ありハ一役の事ニシテ世間を了スル事
交合多岐ニ并ニ大ニ悦ビ白練を回及シテ
別荘を構ヘ是レシテ源内ノ才を計リ才を
感シテ丹箇屋も主人嘉也源内ノ智略を以テ
若輩も子成あり海ノ友何れも源内ト入魂ニ
ありて出合シ

評曰源内一度ハ志を立人合思あり合源内才持
乃若夫ハハテ取成郭計を以テ吾介まきう此
時ノ五侯おほよ為シト心算シト之も源内
深み能ク火浣布工キテ凡ふとを構ヘ時合

たの案之もあまやしも源内ハ

源内不二山ト云リ一見の事

源内ハ京教も其ノ志を振(ま)りて江
越んと東海屋舟を下リリリリ後長岩剛の志ハ
志あり彼ノ一者シテ皆ク是を体あり亭ニ
寄^并三山ト云(方)多き一見^并源内寄^并三山ト云ルハ
併^并不二山ハ実ニ三山ノ高ト云月ありてハ
源^并シテ三山如クト云^并去^并け^并つ^并一見
是^并小^并東^并ノ^并南^并ノ^并尾^并先^并方^并木^并樵^并杯^并の^并也^并子^并兄^并ノ^并方
也^并木^并樵^并乃^并ハ^并也^并も^并也^并ト^并云^并え^并り^并也^并方

我を常月まづ一宅山して一尺せんと云ふ常月
Pのハぬねのやく木樵のやく木あり自然
九月迄を限りこと云源内終るハ当月限り
赤月用立して常月まづ一と云れハ終る常月
二波と源内と同居して東の尾先の木樵及
押出ら流ハ九月下旬のハ元月を不くは流て
常月終る流終る源内ハ急てををくするハ
紅色松明を持集して白晝を持せり去る依て火
常月くして実を常を拂ふハ紅色松明と
云ハ流内を能く切緒縄を常月用る松明のやく

扱一木の竹を麻油から終る流ハまづ紅色の葉種
へメしと云葉を塗るて乾くまづ火を焼く時を
意中大ぬ大凡まづ又ハ水中に入ると云ハ元月
消るる火を消さんと云ハ流ハ去ら流終る忽ち
消るる妙あり紅色人ハ水中に用る要具ハ松明
を常焼く時ハ百歩の中を白晝のやくまづ常を
拂る妙ハ流ハ常月の流もなく絶頂ハ元月
源内流内を一尺して子を打て中ハ流ハ中華
日本ハ君子と云ハ流内子と云ハ流内ハ流内
流内を一尺して流内ハ流内ハ流内ハ流内

冥く申より入りやう然るは日かの方より尚て煙火最
として冥より常極警あり人常眠るを令く日本ハ
義人の強手風風之の中より東西ハ日かの方として
一月人常警之に事。是てハ事の常候物を生育
その古相より研究

神若長長の流が東西に在城ありて武備文藝
たより備りて必く武備より尚たり志を立國益を考て
七辨ひるくは如乾一難一辨を治るよハ山城下の
住居せずハ城乾一 在よりやう言名の下より居るんハ
志ハ立乾一と云辨より地理天文を考るよ武備の

分中より尚て雲の星色より今を言ふよ登り
名を立強ひりハ田沼より後成之は人ハ入て志
を立一と初て望んかて之を成之ハ入り
云ん魂起りハは付之とや夫方所くの乾不節
而を二見して岩淵ハ成りは成りて之より望ん
言事ハ入へき工事をこしりらと

源内後河に泊るる

夫方源内ハ岩淵をお立して後以本町沙丁自
暮夜より歩くと云旅亭に泊る源内ハ也途の旅
在りればハ暫く後河に逗留して是を旅の

新編一と一と思ひ亭之と在東のを唯部一
少の我もるの口は西道の浪人之け度望春の極ま
下り不長途の旅行取限あまも是を一乃極ま
あり尚不の江戸表の西徳中の方正在書のもりありハ
何卒世々尚不の足を休め取用の助をも接交
及之に評何そ尚不の流りしりハ定る存て
指導を文中多し繋分相懸ありるるはく一
たくと云られハと在東の中よりハ西徳月の表ハ出入
六ヶあり取巨細は知難し町家の主徳あり者たハ
在東学文子の一五掛極難とてハ一切致し不中

幸ひ源内元方流きたり及あれハ夫ハ一版のり
然ハ其度西世話より一語あり一語をを
独旅人許なくとなハ我り学文の甲乙をを
言免も角も取入るを云られハと在東の源内元
といひ云語といひ一方ありぬ者と思ひん易
を徳の者く世一りれハ定る田舎儒者の筆
何程のりありハと口人云合て何れもせよ
語して試む一と云は東の定る語きり

源内儒学構法のもり

か人の者ハ源内学文を試んとてと在東の定

趣き先与在忠の一案内ヤ入るハ西旅人概ハ四半
迄百江戸表ハ西遊行の中由西よけ度西遊留もの
を方大悦のる之殊又儒学ハ指南のり南所
あてもおく学ひし者も西遊ハ青田舎学文を志ハ
換るこハ先生西遊留中ハ教授マ下ハ左ハ兄ハ
推系波は之とヤ入るハ源内是ハ西遊ハ之と
言ハこれハ夫人の老古ハ唐表ハ色ハ源内ハ一礼終
て中ハ惣志思ハとヤ志ハ教文ハ成ハある志ハ相志
こハ古学を西遊ハ之とヤ志ハ教文ハ成ハある志ハ相志
此志ハ同南縣次ハの社中ハ惣志思ハとヤ志ハ教文ハ成ハある志ハ相志

中ハ新古の学文何も宜ま不ハ取用ハ之ハ何も
せよ是下方ハハ試ハ西遊ハ之とヤ志ハ教文ハ成ハある志ハ相志
ハ各ハ詩化マ之とヤ志ハ教文ハ成ハある志ハ相志
考ルハ源内ハ志ハ教文ハ成ハある志ハ相志
志ハ教文ハ成ハある志ハ相志
試マ西遊ハ長篇一詩化マ之とヤ志ハ教文ハ成ハある志ハ相志
後を消ハ志ハ教文ハ成ハある志ハ相志
おの志ハ教文ハ成ハある志ハ相志

南歌曰此説非也源内未知待文程歌詠諧玉見一首
之佳也况詩文乎

友人の志言を巻おく達者なる詩人か詩の風ハ世
度の格調ニ結ニ象もさうく経義も定て委る
一と各さうや言合り源内ハ彼ホリ宗先を提
くと今日の雅會ニ候お百字中ノ文章を認めを
右文辭の句法見るとなり友人のあ一か一これ
ハ田舎学文の換き上と源内ハ速者も思を命
か人一同ノ路を上げ拙者も尚不本町源草香
の者も之独学因陋取入るも之何とぞ暫尚不
出還留つるに拙者も亦あつて能く計こつと志
よりこれハ源内も化るべきに孔子を見文これハ

安堵の思ひを命してまかして且経義此講義
著しルリ出城内にもは拙者を傳へて志の書ハ
今日も出席して実も勉志昌一たりル源内も
且門外ハ多一志ハさうし初り結文採藥をそお
よハ本草も委友を玉の醫師也傳へ二三百人
費子身これハ暫時子全浪も出来ん交つて
片ハ中相談して何卒は先を尚不留を
度おこととま一各中合て種古不遺法を云ふ
お後一交しこれハ源内ハ由を少おく経義
る之多とくハ何百人か某も夫は不遺法を留ら

れてハ布直を失ふは合之何卒傳てけ石を返く
一と亭之と在る所の密にヤルハ密に在る
江戸表も公様とあるハ傳之字に江戸表親類
多し不用舟在り及此の病常ら初浪を
かくし止るをふた度敷て尚不傳留り
より然るハ先臨矢の如く飯初も半年より及り
傳へ先々江戸表に五越十日掛りしと不用を
早速よ立ぬべし一は伝の中中と能く申され
よと傳へるべくハ此れハ在る所も密に毒は
てまといひ孤山難義之なるハ此れを言ふ不用

お海より西海までと申中ハ十日の休日と申し立
源内ハ旅用言ふ申中も候別として金銀衣履
おまゝに預りしれハ旅用金も此の指支傳候集り
り源内ハまゝお立して休人を石にて江戸
表へと返さるり

源内江戸表に趣くる

まの源内を石をゆめくと申すしり程あり
源内も源内も思ひるハ字に京大板に
とて三ヶ津と評判程まで品川の松子並を
是れ其の所の歳を以て因メまの日本橋に

西の方を詠むれハ 河内丸 西の丸並松の中
亭くたり白壁ハ日映してひとよ花の散りし
歎ひ櫓くの嶮峻なるハ大山の岩のやく 赤塗の
長廊引連禰の塙垣のま孤室よ 將軍の空
城の勢ひ日本廣しと云かゝる巖をゆる亦人衆
の集りたる傍地ハ五へく其山丘の因メハ築根罨井
を咫尺の門極として大向東に漲て入海の祀能
趣キ繁華此故會堂よは神玉座の地ハ是こと
栄店ハ獨歩掛ヶ壁く是を休め居りし
江戸表よ知る人々を仰し先づ了喰町とやハ泊家
も五中是へ者して其上まで江戸に留りしと家
来互連した喰町の旅籠を錦色彩雲と云ふ志
の方を以て宿を求て休む所折良鼻月のはるれハ
空かき曇りて淋雨頻りに降りれハ宿よは留
留しけり旅籠ハ在在のつ中身しよあり 河内丸
ハハケ旅籠高よは逗留と云蓋ありしと在在は
の西方ハ何方なるか其西方ハ逗留と云と申れ
河内丸よ思ひけりハ後河内ハ在在のつ中身しよあり
也一在在底に趣旅籠よも味し強くやゆせんと思
案しけりけり一の妙汁を思ひ出し旅籠よも向てや

りるに旅をぬるに旅するに元来酒井家の家士
して取立てを許す立退し者之に旅を容易し
地限を安しき形に以て旅をゆきて与る事
に物言と思へ不審ならざるを恐る中さき
實ハ人を執して立退しと妻物言にこれ元来
下節のくせとして物言に思ふべき者なれば
任天しお二人執し此方旅を元来元来
殺しと一羽を居ては身の上危し一羽を
するにれハ容易にハ遊ばすし一羽を
我一人渡りぬりしに由物言せんといふ

竊に旅者を抜出後日遊ゆりし源内ハ公の信
家来を逃拂ひし中大に悦び是をハ公易に何卒
手寄を掲げて江戸表に任居しと一羽の宿の
亭に彩雲を呼ぶに中分ハにむ道首信に世
話示し家来するに用立て申すに
おるに七羽の登流を中分ハに約込切の町家
に易者あり江戸表に居候に波心底に若又を
者知るに亦し旅者を入ると云はれ
彩雲ハ謀計にハ旅者も知す易き事なり
乃し此方一と丁寧に申すに源内旅者

代ホ勅定の上令百近五出—是ハ怪カ所カ内
方ヨを上致之是を山録とカ—以事古執入る中
ハレハ夫婦ヲ悦テ去テあるト—
をカ立—

源内三浦平之部方ハ尋常事—

源内ハ三浦平之部方ハ尋常事—
町人カ—も利口者之旅人進留ニ言限カ公法之
繁ニ言を執—て逗留カそれと改カ石中ハ繁カ人
取カ奇カ所カ新法ト見カ—我カ先カ改カこれ
内内ヨ立去リ—するカ此カ改カ—

此カハ並—
免ヤ新ト心カ痛テ先カ一カ警華ノ地儀事
上カ通カ類キ一思案ト—
内内カ心身カ其ノ儒生三浦平之部ハ近年加賀
ノ西カ地松平出雲カ度ト石出カこれ志カ持カ
劣カ彼カ方カ新法先カ面談ト—
ト立—
掛カ三浦平之部ハ其ノ産カ—
是カ人カ知行カ石カ依—
世カ用カられ—

章經義も委キ人之如雲也度屋敷内より居て
日々講読眼命一ヶ月も會讀の家申すてまじ申
五次を以中入り多額別九龜の人平賀源内と申
老成中先生と山目三掛り度申上下忌用と申す
也何返答して仕わとそ申り申す申すを以て世々
忠案一一向不覚人あり名去案を尋ねるも
大方志生あり一何事もせよ 度敷と申す一と
案内志れハ源内ハ大に悦び度敷と申す事
平之部ハ小神上申改て度敷と立出初對面の礼
義終て平之部申りハを源内の不覚表と申す

度敷も山目と申す此山目府の事より也亦此一家
事も度敷の當所ハ山目府を何方より申す
初りれハ源内ハ恥一けし難を下々度敷と申す
事包む一は話なり 拙志義元年撰記度敷の度敷
の序よりして病身在中に病を續せお府仕合あり
初め方学文を好し以て夫れ夫れ志の義申す中く学
びて度敷と申す是誠なり 度敷を以て歩行せし宛
兄堂中の何卒生涯多事多難を以て世を
送り度敷の江戸表と申す一向に知人とも
書きたる志の不案内と申すも是より振る一

夫取此高名を承ひて接見の上我才の上をも此冊
をも頼りしと急流の中より其形悪字も海晏く
眼中に涙を浮かぶ字も抑強りれは年之節も感
心しおと感し入心鹿島より入之先を抑志
立、此道留しりし江戸表に此氣も其よりたし
吟む此義を宗入の徳生のもうらむと一書目徳生
とてても若しうましとやられは忘仕合ことまか
して源内ハ瓶山先生の定よ宗居して日講義
も不忘言名の人を尋りるとも

朝鮮人來朝之事

寶曆十四年甲申三月十日朝鮮の三使來朝して東
本願寺に謁者なり 仰舟宗對るち度かして萬壽
此に斗字より其を以てし 飲食應之江戸を在り徳
儒医の面々學入るる者ハ年て遙對り出方志更
申すも秀しる面々ハ

中時浪人後尾藩儒官歸來 細井志之節

浪人歸令我 井上文平

浪人 淡谷春吉門

浪人歸海鶴 植村 台翁

浪人歸金虎 山鹿庄在門

將軍家の下吏 辨友忌

篠崎五左衛門

浪人 辨仲山

膝部新藤

枕家学 辨松西

鼻 惠 市

西橋本山 辨中

小津 彦 彦

浪人

千葉 義 彦

將軍家の下吏 辨渡

言田 六 彦

浪人 辨急山

比山 友 仲

浪人

菅谷 勘 平

浪人

平賀 源 四

燕 彦 彦

名波 十 彦

南畝云
源門杜
書恒不
能倒書
也

右以上拾女入 東本朝古もの本堂より居並んで
筆淡時を移し 以て源内八平三希の懐る三浦の
宅に寄宿して け度の手話そ 籠山の妹女なる
お席し けりるあれハ何卒人々 けりる手際能筆
談せんと 着て 心裁けりる 筆淡の席 ても
容易よ けす 或日源内筆話よ 及りる 射射鮮人
待を練して 云仕書と 紙を けりて 源内
あは けりるを 源内和韻して 逆し けりる 詩を けりて
之候 射射人 けりる けりる 射射の 志ハ 勿論 一彦の
西へ 源内 けりる 射射の 働手 清穂 凡 雅の 志ハ 詩

他の進者を慕うもより或は良妙の文を感心して是を以て源内ノ文如鮮日本一同ノ古を考て及しと云はれ草法を兄史せし人ハ云々及史傳ニて平之部ノ方ハ出入者源内を稱賞せざる者ハ平之部も亦其文を感心する者なり子龍山ハ古老の儒者也源内ノ其文又亦其妻愛する中ニ其體の老而して其志惜むべきハ彼レは實中ノ篤實の經學也其ハ此すやゆと云ハ才一才の秀なりと但せて人ハ其入る事妙之と云ハ方を立するを才一として實其ノ應ニ去る

純交す人ハ其ハ此と源内ハ其居を定む一と考へ云る者源内も是よりして居所の才を以てし方と云

源内始ち居所を定むる者醫師児瀧圓達也源内ハ其文如老也子龍山ハ其居を居くも其一之上ハ其方其體中ノ其申ニ源内ノ其量ハ版セしを知りし者今ハ其也ハ其易しと云ハ其居を會ニ去ル其體中ノ其指其る者其初子龍山先生ノ其食仕るるも其年幾しと及りし其也其居るも始終不其海との其居は度居居を

志のらるんと為り之終処正府内忠徳本のあるは
 店語をくして今店を借る者ありを所家より金子
 杯も此を以て大別版に取らるるを頼むるも親分
 やりよぬ中意人應り為り何卒此屋を出入
 之者らに作有下町をこめて店一新正借りて
 を学波同家の心掛より故を造他ハ入不中とい
 金子指支持系波一頼りれハ師匠と云殊源内
 仍状信如ハ易きること出入町人言中身屋を
 移古而借り並留ち居をきり分ちて新所
 或丁目は飯り小店を捲引移りし籠山も悦して

南畝云
 本州會
 宝曆七
 年丁丑
 湯嶋會
 始也田
 村元雄
 主也委
 ハ物類
 出 品 障

お應り有る音伝杯して表向ハ悲こふれ也因ハ
 亦解ぬ趣之源内ハ表札をお一 儒醫の古籍本
 會續講釈の看板を出し其上本會を借り
 して其に之神田依之町之殿方学波初りし時分
 取医学無名昌の時之家より申擧進退思流系達と
 いふ即及を源内ハ本會を出して珍交會之
 今迄取らる本會の會ありといふ會續本ころ
 古籍の沙汰斗し然りよは度平祭源内といふ
 古籍本會ハ九立一ハ幸成り樂も年未葉
 葉ハ苦んり出席して急量の程を減人と

同志の醫師拾六名より各吳草成を多歎の
吳成を指系して案内して入事れハ源内上席
客位を設け以下の諸君在座し最並ハ和漢
山海の吳成を集メ衆議判を設けしより急進を
急對強て某成を立出シ一應議判ニ及ぶ節
大辨より各も有しれぬ吳成ハ何も源内委員
知りて和漢の名目明しより有て論定る又源内
正持の如ハ大勢集ると云ふも一として智者
數日の會何れもたのやくこれハ急進初段中
下本草家と稱する醫師源内より居伏せざる一人

即ち是を以て源内を急と云ふ如て儒医を
信任せり急進ハ急進也如程源内を恃む之
中々及（き）よ進ると云て社中の志も急進也
然るに於てハ平賀程如ハ急ハ急と感心して夫ハ
心易出會り源内ハ本草會を催せし原ハ
急進を以り急進也急進也急進也急進也
もかく中華醫局の名座たよ招集し諸大名
も出入を以る抱かして沙汰を以て申す仕度
此急進也急進也急進也急進也急進也急進也
評判しより夫を以て某程急進書物急進源内

在りて和漢の書籍製法を或ハ書信新法の
正法有り寸暇なく其旨ハ會讀講新法
出入りあり外ハ廣く其旨ハ和漢中華と
も若を揚しと云ふ事ハ初めと之位居杯も
手授けられハ神田白壁町に精舎して旭漢堂
と號して儒學者の解説ハ先法を送り与

金峽先生源内子對面之事

安永日中橋平松町ヨ井上文平と云儒者あり
金峽先生と號して其名成人之源内ハ先年
朝鮮人應對の時中取与る面談ハ如しハれも

志みくと應對せよつゝ 世方の其私を考ふる
金峽先生ハ今此府内の豪傑秀女の志之上徳者
あり扶持ヲ与てハ其事人傳之亦細井志之節也
經義も能待文も達者なれハ恒爲成人物と見
たり又其先生と稱て其人ハ雲漢の字依見書
あり徳翁の社中より上徳ハ白水と云者有る也
徳翁の社中より白水也助斗りあり二先生と
稱す其志ニをハ述りて應答實の君子ありとす
然も今我を破す人ニ志ハ金峽一人と思案して
或時凡ハ金峽の宅に訪り金峽も先年朝鮮人

東朝の時分を後西流しとれをあらしと云ふに
吾も尔来の西流を笑して奥底もかく物語して
全我源内より多し人よんて七癖と申しける
と云ふ俗談ありと云ふ事一の癖は兎角
人よ後する大徳ひと云れは源内も如祖を
向りを人よ後する大徳も好まぬ志之を去削
せしむ時ハ居伏し人を削る時ハ大徳の聖者を
辱ふりやく勢を自在にせん人乃の肝要なるを
と思ひしと云れハ全我も互に互に夜物と
返答し酒肴の没言以てて無子入りしを

正月十八日之終りし鯉のさし方を汲山よ申しは
源内やりのハ是ハ珍友の骨を下の初鯉ハ生涯
初らんと答れハ全我ハ物を云はず吾も詩を
知して答ふ一四方山の岫まで源内ハ改者一り
記す全我源内ハ悪き奴と斗て之後源内
其れも又よ述りしと云はる世人誰も知
る事

評曰全我ハ源内より事しハ今ハ及の為に流を
我力量を量らんと云ふ如し一何条彼木子計
らぬんやと初鯉を以て源内ハ物中を知らたハ

源氏物語と云ふ一
南歌曰金我ハ上戸源月ハ下戸之源月雖の是方
而も悦ぶ者ハ非ス二君とも平ハ慈念せる人之金我ハ
文ハ長シテ詩ハ下戸之源月ハカツテ詩を伴す
下戸詩を神テ物言せしるハ亦ハ虚語之

源月ノ美しき

源月ハ金我ノ面談シテ者下ノ成リ金我ハ一云
を能ク考ヘ我を容ぬるをよくも悦みればハそ
後ハ出會もせむ者なく一更を思ひし世の中の
趣を考ヘしより尚何世上の孤子を考ふるハ風俗志

惜弱キ一テ美るハ世に廣ク人易るハ一テ人の耳目を
驚らす世の中ニ一ト上武家町人トハ其形貌筆者の勇
振リ移リテ浮常有ハ風俗之中一子志を立んとする
者ハ世の中の好む所を以テ解を以テ一世人ハ如物
一物一是鬼谷子の御中一テ蘇張の學び一御之
何事もせよ世上まで用ひられせんハ金浪ノ美まん
る必定之金浪さハ江山を御ハ人をあつらふる
自在之と云美シテ神冥矢日渡と云義を更ハ布を
作リて出ハこれハ本邦之布世上に流布シテ
自らも金浪を集め源氏大双紙式ハ金浪

利を記杯そ介ハ浮世ノ邊ノ方邊本志のれ本義双枝
の孰おひとくく作出一福月鬼印と仮名して
他者同あハ汚名をも恥シ雅俗の区別も亦金銀
さくを志をハ皆知こ同あハ出會して世の中を欺
りハ名志本義ハ委なき者有ハ本義會ハやた凡
流才一の人をめて世の中ハ合セらる有世人の習か
れハ良存ハ面白きもの月々身東西由ハ平賀りるを
感セしる者無りしと名

祥曰源内ハ誠ハ学文の邪魔を仰一尚世俗学の
元祖ニあゆと云ハこり文子但せて仮名出と一して

雅云を用ひ或を必字解ふとの書物を扱へて学
文ハ師匠いすすハ出書者之と世人一統ハ有
左篤実ハ学文一ハ聖門ハの者一人も仰一
唯和詩和文彩化を是として聖經を之用の
書物とあれり是合く源内ハ邪智ハ和せしれ記
を以て世人の爲相之是を以て考ふるハ
瓶山合義ハさすハ古老の儒家之源内ハ文子
殆入す絶交したるハ源内ハ上を引秀文と云
子之懐ハ男を立るを急ハ出ハ邪及の初之と
云ゆく源内ハ秀文を以て実学ハ入るあハ

款を志す不^レ可^レ悲^レ一む(き)る之

南畝云依^レ孝^レ友^レ教^レ行^レあり^レ旨^レ後^レ程^レの^レあり^レ此^レ世
又云源内^レ必^レ字^レ解^レを^レ能^レり^レる^レを^レ能^レる^レ府^レとい^レふ
少^レ中^レの^レ必^レ字^レ解^レ此^レあ^レき^レを^レ見^レて^レ傍^レ註^レせ^レる^レ
あり^レ実^レ学^レハ^レと^レも^レ出^レ来^レす^レ女^レ学^レハ^レ惜^レる^レ之

源内甲列洞山を叙す

源内ハ世上を思^レの^レ後^レノ^レ款^レ一^レ寫^レ実^レの^レ志^レハ^レ少^レレ^レも
靡^レく^レ志^レふ^レれ^レハ^レ我^レ存^レ身^レも^レ終^レハ^レる^レ破^レ一^レケ^レ孤^レノ
言^レ名^レ子^レ及^レ一^レ六^レ令^レ浪^レを^レ極^レ二^レ吏^レ東^レ一^レと^レ甲^レ列
洞山を叙^レり^レけ^レ洞山ハ^レ西^レ園^レ山^レと^レ容易^レノ^レ身^レ入^レ也

つき山ノ^レ淋^レこれ^レハ^レ西^レ代^レ友^レ上^レ孤^レハ^レ一^レを^レ危^レ
と^レ吏^レ一^レて^レ漸^レく^レ代^レ尼^レ命^レを^レ安^レる^レ極^レ極^レり^レ令^レ之^レ
去^レ令^レ持^レの^レ出^レ林^レ若^レ大^レ坂^レ表^レる^レ世^レ話^レ一^レ方^レ砂^レ糖^レ化
吾^レ亦^レも^レ抱^レ込^レて^レ由^レ聖^レ所^レの^レ居^レ宅^レを^レ立^レ流^レ子^レ播^レく
洞山^レ西^レ園^レの^レ表^レ札^レ亦^レを^レお^レ一^レ在^レ相^レハ^レ源^レ内^レヲ^レ叙^レ入^レて
甲^レ列^レ洞^レ山^レを^レ極^レ由^レ之^レ彼^レ源^レ内^レヲ^レ秀^レ女^レを^レ以^レて^レ何^レ条^レ仕
換^レる^レて^レ是^レと^レ令^レ浪^レ子^レ富^レ一^レ方^レ町^レ人^レ名^レ身^レ入^レを^レ一^レて^レ令^レ之^レ
又^レ身^レ之^レれ^レハ^レ令^レ浪^レの^レ名^レを^レハ^レ又^レ身^レ之^レか^レ一^レ又^レ之^レ年^レ京^レ都
の^レ三^レ井^レ第^レ在^レ府^レ江^レ戸^レ表^レハ^レ亦^レ府^レ一^レ之^レれ^レハ^レ源^レ内^レハ^レ今^レの^レ月
色^レと^レ吏^レ一^レたり^レる^レ或^レ時^レ八^レ家^レ在^レ府^レ一^レ之^レ代^レの^レ西^レ之^レに

中身ハバ乃道留申風字を承りて南不云平賀
源内と申老附之申秀文あり老の由和漢の由
委愛之上義矣申之申色く何作をして世上
有る福判之元来何人ありやと云ふれハ年代を
中身ハ彼ハ口出浪人之妻有ハ不存と云三井人
申子思ハ彼ハ彼白紙を信じて家ハ恥辱を
いとひ一平賀源内あり一筆量と云云と云路
入野人相之久去令浪をハ浪山子云持今我
令浪を以彼ハ先年の謝儀を述る相ありハ彼
了る者ありハ定る由あり一昔は度甲列

洞山野人とあり申金子入用必宜之能時長あり
と云夫して子代ハ何事あり源内方ハ訪一
彼ハ本業く委愛経義も富たりと云及ふ
名物あり人の通ハ能学文こと云れハ年代を
同んして源内ハ定る由あり

南畝云白壁所の居宅ハ乃の裏店之立流子遊
吊もなかり行て見し

三井爺在場門源内ハ定る由あり

去程子三井ハ休人大勢石連て白壁所 平賀
宅ハ案内申入るハ拙者ハ京都ハ度由

地は古府波の志と云ふ先年の此方名取及の
何卒山月、惣より何角の此物語をも取交又と
京都の能き古産あれは、いさしく、何候仕立透り
り何卒山月、通つていふと急流、云入るれ、源内
け中を少何事もせよ、産交に任せと申すも
衣襟を改てお違は、三井も威儀を正してお参り
る事と云や、智者の取あれと六七年も己参り交
りて、一面談せぬ者あれ、先ッ産交にて三井態
懃より、身をいふまぬ事、拙者候は、京都、住居仕立三井
此等、古府と申す、先年の此方名取を取つて、在り

りの古産、貴何候仕立、此等、此等、申す、いと
迷ふ、源内ハ三井り名を少お、先年上京の時分
五入、(子)汁、白人白綿を、交おせ、(子)主候、
控、(子)謝礼、(子)事、如、(子)名、去、彼、も、應、(子)の
町人、之、白、綿、り、り、申、(子)出、(子)ハ、面、伏、(子)ま、ま、(子)一、(子)と思
案、(子)て、何、と、か、く、申、(子)ハ、思、(子)名、去、せ、(子)ら、れ、(子)ハ、思、(子)案、(子)加、(子)
先、(子)く、是、(子)ハ、思、(子)案、(子)加、(子)と、一、(子)万、(子)の、(子)関、(子)取、(子)申、(子)ハ、(子)り、(子)

源内三井を餐意し奉

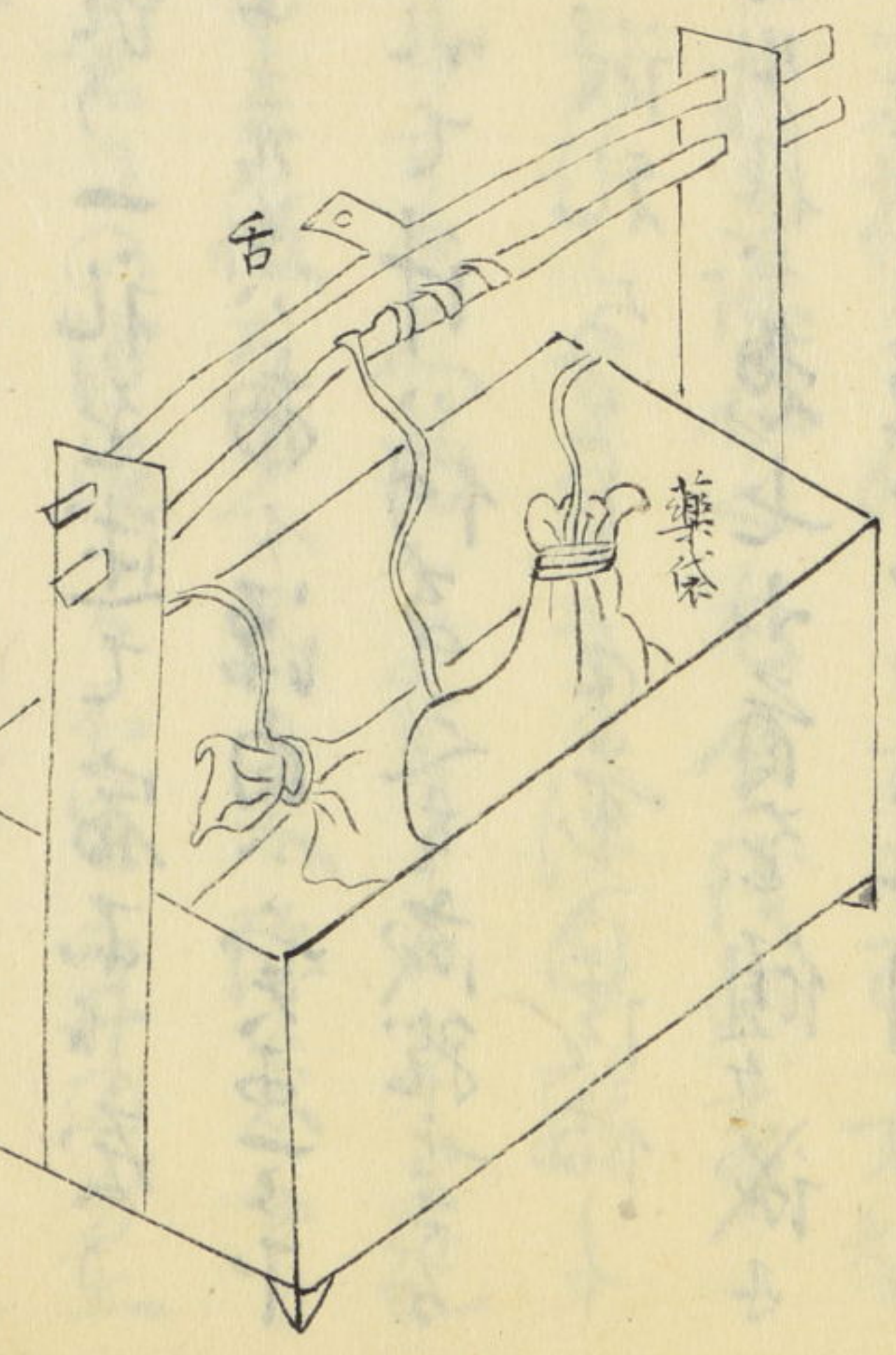
源内ハ三井を一、(子)申、(子)ハ、山海の珍物を、(子)取、(子)て
餐意し、(子)上、(子)る、(子)ハ、我、(子)不、(子)は、(子)万、(子)家、(子)居、(子)の、(子)時、(子)分

紅毛の工しきと申す神妙なる及具を求むに西曆より
 西漢子入つと大角の箱を造りて長持のゆく
 成物をおす三井も珍なる及具之何の用よと云ふも
 曰りれば源内中よりハ是ハ人万の病を火をこらし
 及具之既痛又ハ熱未絶き者ハ火をたしハ席
 子を合せ致すことと云りしハ

南畝曰工しきテルロセイリテトを傳じハ長持の政府の後
 三井も驚入おる珍なる及具之おを足合火の者不
 を汲えすつと云源内中よりハ押付仕掛て西漢子
 つ入と云ふと工しきを組立て座上に次子と云ふと云り

工しきの器

長廿三尺横五尺
 深廿八寸
 唐木面取
 舌合
 線何れも合線



器の如く工しきを席上に並べ下は土氣を避る
 粉茶を耐散して家来を呼ぶ一肌を脱せ竹
 筒を肩先より吊て轆轤の木を以てこまに随て合

絲合舌と互に相合誓くして中道の先より
火あるより熾燭の火の如く尤も火之人の如く三井の
句論より奇妙なる所多しと各感心しつり
三井の種々馳走より一礼を述べて宿ふら度り
手代あせと申者の中より相合源内の実より下
の秀才之彼より才を以て計ハ何より之を成就せざる
可らるし先とは方の附礼ありし手代は待し
て一礼と云ふしと云れはあせも首を傾け誠子
難入る才子之併は方日嘆息するは其を用ふり
を上げ方日此出のりし以来ハ改めて成就す

惣七可
謂有眼

や何といふは方の家の儀ハ大淵此時代ハ由緒有
高人之評文無益の器物を好む者も己より才智
を人より奪て全報をば謀利之尤も全職の事ハ
其事あらも苦むるしと云れと言名する源内評は
手代あせの益より人相を奪しはる事能
の志を承りし以て所の之後る也——又評案を
を集の樂しむる者奢りの沙汰言不直三井の方上
言評案を求むる彼ら所持の位ハ一時に集るる程
有り以事ハ此か會ひを用こと中りれハ三井し理は
依し令部より使者を以源内方日給るを以評は

一向は通話とてハテウリウリ源内ハ何年迄と
成りて三井を承鹿押とせば全張ハ自在也と
謀計せしり案ハ未達して是ハ三井とハの
不和と成よりり

源内梯の事

源内ハ種々人を死して兎角世上ハ流行事を
子史一ウリウリ風を心付て例證を也傍が多く
持系一ウリウリを五かして是を梯子引うせ限めて
む祢とを分通うよふくア人を掛是を世上ハ廣
めんと當時吉原なる名言キ北系丁子屋の離露

丁を歴としハから何し其名の未るハ何ぞそ
彼より世人と便を求りてハ一瓢としハ事
既^{七十}ありて涉第サア丁ハ任指一ウリウリ彼を頼み指寄
中ウリウリ方ハ心そうハ於む一ウリウリ於まはして
てハ是ハ云一瓢中ウリウリハ是ハ先生ハ改うりハ於
外定て何ぞ容る成一何よりハ守他之一切
仕す一ハ心重なるハ任指一ウリウリと云ハハ源内ハ
大よ能

南畝云兎井梯と云梯之是ハ神田大和町代地細川云
葦原表前より移り一以之門口ハ一本の柳を植ま一

ひき方の一玄士の金井之何を隠さん家おる先日
沙菜は来訪せし時丁子屋の雛鷹といふ抱女を
見たり彼ら急量言ふ李夫人楊貴妃と及ま
き玉色之一度笑ひ玉を傾るの面き一恥ぢる
影中^{キノマ}に絶す依も何卒彼は一扱の髪を落し
今家自身吉原へ行くは大船の入り出揃ふれ
他は浅ん多変せし家お世を仰む分なれ
大石の前の小石の何卒其方の宅に招き家出
胸をもくさせよと解着なき体よヤリリ
一雛ハ驚れれを怪む誰も回しりてあつた事

ふもかく陣交平賀ハ名有る未なれハ金銀
はあはるし今そ累小傾城なれハ金さく五れハ
自中と子連承引して史分表吉原を走り
茶屋を以丁子屋の中入らハ沙菜ハ一雛ハ
雛鷹様ハ去ル其方内こころは傳え人傳るハ
中冠し是はあつた式又ハまはる集り中入ら
雛鷹も急て一雛とハ易するれハ此方ハ
あれと云やれハ一雛ハ雛鷹ハ産後下江
相傳して中入らハ近江無解美心ハ
つて下式と於れハ雛鷹ハあつた相を

合有る客人を我方に引付ると心得てお返し
 するは承知致さんと申す時は一瓢申すは
 明日以降とあるは私宅におかす下し去る方は
 手紙申すれうは此方におかす甚を急多れは
 私宅に於て唯この色に成ら下ると志願子成て
 申すは離露のし振を大名の差なり又大名
 の所家へ伺はせよ高賞なれは早速親方へ
 件の振子物語しは親方へ承引して早速
 一瓢の方へ用意とそるしは一瓢は大小悦ひ
 たくは源内、宅へ行て志願の趣き復りは

源内は大小悦ひの口と訪て一瓢の宅へ趣き

総江流
 蔵

平賀實記上巻終

